

JOMONあかのみいが邪馬台国論争へ参入していきます。

『魏志』倭人伝中の「卑弥呼」という記述の奥に、日本古代史のどういつ**事実**があったのか？ **母系制**社会の名残や呪術的な**冥想**の有益さについての、民衆のロマン。ひよっとしてご当地に日本古代史の重大な**事実**が埋れているのでないかという、村おこし町おこしへの希求。

実に、考古学・民俗学・文献学・言語学・政治学・神話学・天文学などを総合する論理学がないと、「邪馬台国」「卑弥呼」「倭国」の謎を正しく解き、日本各地のそれぞれの民衆のロマンや村おこし町おこしへの希求に正しい秩序をあたえていくことができません。今の日本の大学などの研究体制は、たいへん残念ながら、このような総合性から逃避する傾向にあると観察されます。

しかし、大学や官庁と新しい文化教養産業や村おこし町おこしの**スキマ**を埋める、対話活動こそが、日本民衆の**元氣回復**の鍵です。

邪馬台国論争が、議論百出、わけのわからない状況にあることは、かえって民衆（新しい文化教養産業の消費者）の画時代的な**欲求**を象徴しているのではないでしょうか。

JOMONあかのみいは、邪馬台国論争をめぐるさまざまな矛盾にこそ着目し、信用できる情報を紹介しつつ、他サイトとリンクしていきます。

まずは、気鋭の考古学者・寺沢 薫先生の『日本の歴史 第02巻王権誕生』（講談社二〇〇〇年）に注目しました。この本については、政治学者の滝村隆一先生が『国家論大綱 第一巻上』（勁草書房二〇〇三年）の三八三〜三七頁において批評しています。

ここでは、寺沢先生の主張を山田 学なりに要約しました。  
漢帝国の影響もあり、弥生時代の北部九州に、**ナ国**と**イト国**という、**部族国家連合**が興隆した。ナ国は紀元五七年、後漢より、『漢委奴国王』という金印を授った。また、紀元一〇七年に後漢に朝貢した『倭国王帥升』はイト国王である。

紀元三世紀初め、後漢の混乱の時代、日本列島において、卑弥呼を共立し、日本列島初の**王国**が誕生した。卑弥呼を大王とする倭国の領土は、北部九州をも、奈良盆地をも含み、西日本の大部分と東日本の一部を包括している。倭国という王国の首都はヤマト（奈良盆地東南部）の**纏向遺跡**である。邪馬台国はヤマト（奈良盆地東南部）であるが、卑弥呼の居る首都（纏向遺跡）は、ヤマトの伝統的な唐古・鍵遺跡とは**無関係**に新設された。そして日本独自の**前方後円墳**の建造による呪術的支配を開始した。ヤマトは地理的に東国支配へ向けての軍事的要である。

倭国という王国は各地の部族国家連合を包括していたが、部族国家連合の勢力として、ヤマト（邪馬台国）が決して最大であったわけではない。最大勢力は**キビ**（吉備）であり、**イツモ**（出雲）、**タニワ**（丹後）、北部九州（イト国やナ国）など、大きな勢力があった。権力と領土の発達段階、卑弥呼共立による首都と呪術的支配様式の新設、という視点が必要である。

なお、弥生農業は日本の農業文化の**原点**であり、二十一世紀の日本の農業文化を開拓するため、弥生農業の正しい調査が**最重要**である。

さて、この寺沢先生の主張とはかなり傾向が異なりますが、有名なサイトであるという意味において、当初の「中味」としては、あえて「邪馬台国会」へリンクします。この有名サイトにおける議論と寺沢先生らの矛盾をどう解決していけるか？

また、「二十世紀百年間における邪馬台国論争史」をコンパクトにまとめた岩波新書『邪馬台国論争』（佐伯有清先生著）が二〇〇六年一月に発行されたことも付記します。